

# 北町遺跡

—県立飯山北高等学校体育館建設に伴う調査報告書—



1984・2

飯山市教育委員会

# 北町遺跡

—県立飯山北高等学校体育館建設に伴う調査報告書—

1984・2

飯山市教育委員会

# 序

飯山市教育委員会

教育長 浦野昌夫

長野県飯山北高等学校の体育館建設工事が着工されるにあたり、飯山北高等学校長より、同地籍内に存在する北町遺跡の発掘調査事業委託の依頼を受けました。飯山市教育委員会は、文化財保護の立場からこれを受託することにし、飯山南高等学校教諭高橋桂先生を団長にお願いして調査団を編成いたしました。

発掘作業は9月1日より開始され途中雨にたたられる等戦慄苦闘の日もありましたが、高橋団長をはじめ調査員各位並びに作業員の方々の献身的な努力によって9月12日に終了させることができました。

調査の結果、発掘された遺物から弥生時代中期の重要な遺跡であることが解明されました。

この報告書が当地方の古代生活を知る上で貴重な文献となると共に、北信濃地方の考古学に寄与する事多大であると信ずるものであります。

最後に、この発掘調査にあたって御協力をいただきました飯山北高等学校の校長先生をはじめ諸先生方、そして発掘作業にお手伝いいただいた生徒の皆様方に對し深く感謝申しあげて序といたします。

昭和59年1月25日

# 序

県立飯山北高等学校  
校長 外 山 義 勇

飯山北高等学校は、明治36年に創立され、本年は創立八十周年を迎えることになりました。

この記念すべき年に県当局および地元の皆様のご努力により新体育館（1階格技室、2階体育館）の建設・着工がなされることになりました。

建設予定地は貴重な埋蔵文化財の包蔵地と認知されている北町遺跡の一群の中に位置していると言われています。このため、緊急発掘調査を実施して記録保存を図ることになりました。

発掘調査は、飯山市教育委員会に事業委託をいただき、飯山南高等学校教諭高橋桂先生を調査団長とする調査団が編成され、実施されました。

調査の結果、北町遺跡は弥生時代の遺跡であることが判明し、大きな成果を挙げることができました。

ここに所期の目的を達成することができましたことは、飯山市教育委員会、高橋桂調査団長をはじめとする調査員・作業員のみなさまの献身的なご努力の賜物であり、厚く感謝申しあげる次第です。さらに、発掘調査にご指導・ご援助いただいた県教育委員会の先生方に對し厚くお礼申し上げます。

最後に、この本報告書が郷土の歴史と本校の歴史の何らかのつながりを果し、生徒の心を動かすものになればと念願するものです。

昭和59年1月27日

## 例　　言

1. 本書は、長野県立飯山北高等学校体育馆建設に伴う北町遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 遺跡は飯山市大字飯山 2,610番地等に所在する。
3. 発掘調査は、飯山北高等学校より依頼を受けた飯山市教育委員会が事業主体となって行なったものである。
4. 現地調査は、昭和58年9月1日より同年9月12日にかけて実施した。
5. 調査の整理は高橋桂調査団長の指導の下に飯山市教育委員会事務局が行なった。
6. 本書の執筆は、高橋団長以下調査員が分担して執筆し、目次に記した。
7. 本書の編集は飯山市教育委員会が行なった。
8. 出土遺物・図面等は飯山市教育委員会が保管している。

# 目 次

序

序

例言

第Ⅰ章 環 境 .....	(高橋 桂) .....	1
1. 遺跡の位置 .....	.....	1
2. 周辺遺跡 .....	.....	1
第Ⅱ章 経 過 .....	.....	7
1. 調査に至るまでの経過 .....	(小川恵一) .....	7
2. 調査日誌 .....	(黒岩 隆) .....	8
3. 層序 .....	(望月静雄) .....	12
第Ⅲ章 調 査 .....	(望月静雄) .....	13
1. 調査区 .....	.....	13
2. 弥生時代 .....	.....	15
3. 近世 .....	.....	18
第Ⅳ章 まとめ .....	(高橋 桂) .....	21

## 挿図目次

第1図 遺跡の位置 .....	2
第2図 遺跡周辺の地形図 .....	3
第3図 周辺遺跡分布図 .....	5
第4図 建設予定地区及びグリット設定図 .....	8
第5図 層序 (D-1北壁) .....	12
第6図 調査区全体図 .....	13
第7図 弥生式土器分布図 .....	15
第8図 弥生式土器拓影図 .....	16
第9図 近世建築物柱穴実測図 .....	18

第10図	近世出土遺物	19
第11図	旧飯山中学校時代校舎略図	20

### 写真図版目次

写真1	近世柱穴窓	14
写真2	弥生時代遺物出土状況	14
写真3	弥生時代の土器	17
写真4	調査風景	23
写真5	調査風景	23
写真6	調査風景	23
写真7	調査風景	24
写真8	調査風景	24
写真9	調査風景	25
写真10	調査区近景	25

# 第Ⅰ章 環 境

## 1. 遺跡の位置

遺跡は、飯山市大字飯山北町2610番地に所在し、長野県飯山北高等学校々地内にある。

千曲川が信濃の最後に残す平が飯山盆地であるが、千曲川によって盆地は大きく2分されており、東側は木島平と呼称されている。飯山市街地は、飯山盆地の西側に発達した町である。市街地西側は斑尾山麓となっており、上境一鬼坂断層線によって急峻な地形を呈している。断層線と千曲川という地理的制約を受けて飯山市街地は、一筋の町並となっている。

遺跡の所在する飯山北高等学校は、飯山市街地の北端に位置する。北方を斑尾山中の沼の池、湯の入沢に源を発する皿川が西から東へと流れ千曲川に注いでいる。飯山北高等学校は、この皿川によって形成された自然堤防状上の微高地に建っている。標高は315.31mである。

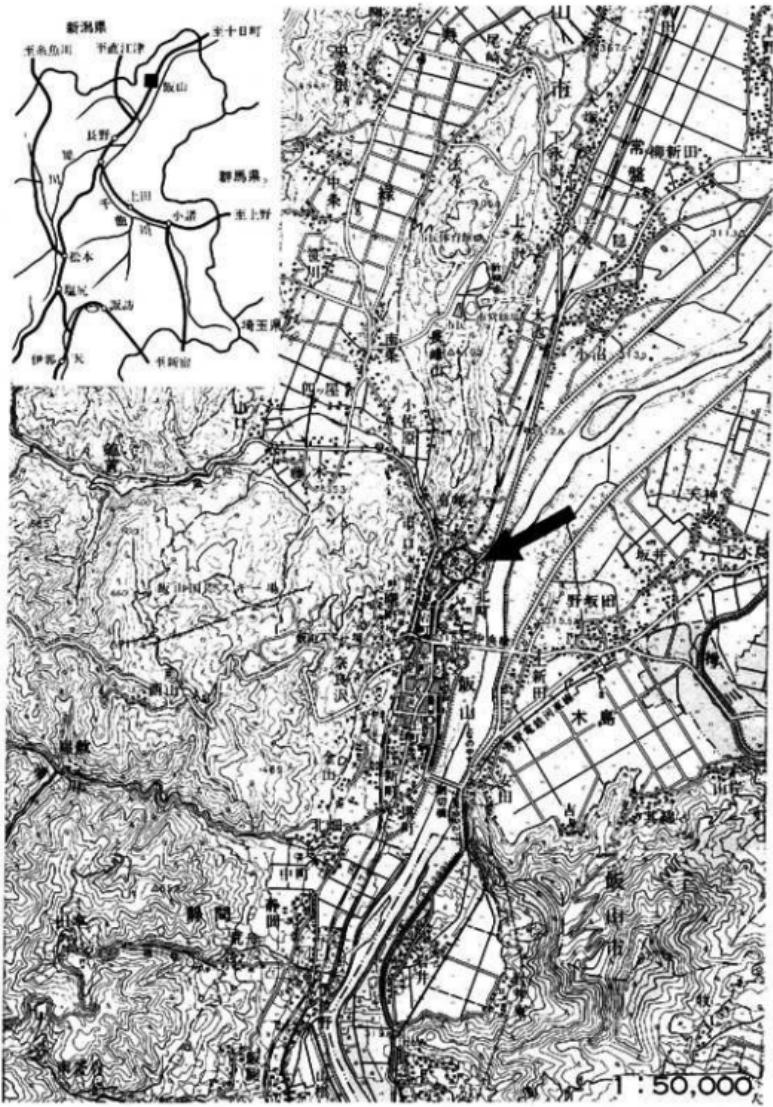
飯山北高等学校の北方約200mほどの所に有尾部落があり、有尾部落の南端を起点として長峰丘陵が北方へと走り、飯山盆地西側の平を更に2分している。この丘陵に2分された西側を外様平、東側を常盤平と称し、弥生式遺跡を中心として各時代にまたがる遺跡が濃密に分布している。

「広義の飯山盆地は、洪積台地の西側に凹地が存在するのが特色である」とら削春穂氏は指摘し、更に「長峰の西側の外様平、片山、愛右山西側の上倉、奈良沢の凹地、城山の西側の田町、北町の凹地がそれである」と説いている。飯山北高等学校は、この田町、北町の凹地(低湿地帯)に臨む微高地上にあり、低湿地帯とは2~3mの比高差を有している。従って地下水位は高く約1mほどで湧水を見る。ただ水質はよくない。

飯山北高等学校々地内に遺跡の存在が、確認されたのは昭和37年の校舎改築、同42年のプール建設の際に地下1mほどの所で弥生式中期土器破片が出土したことによってであった。

## 2. 周辺遺跡

飯山地区を中心として北町遺跡の周辺に存在する遺跡について触れてみよう。信濃史料考古編の地名表によれば、飯山地区の遺跡として①有尾、②雨池、③奈良沢、④上倉、⑤市ノ口ガニ沢上、⑥大聖寺池、⑦城山、⑧十三ヶ丘、⑨福平、⑩大窪、⑪牛首、⑫有尾占墳、⑬小丸占墳等が記載されている。その後の調査によって若干の遺跡を私達は追加し得た。以下に北町遺跡をとり



第1図 遺跡の位置



第2図 遺跡周辺の地形図 (1:5000)

まく飯山地区に存在する遺跡について概観してみよう。ただ、飯山地区に近接する秋津地区、柳原地区、木島地区についても若干触れることを予めお断りしておきたい。

千曲川の氾濫原である飯山地区に人類の活動の痕跡が初めて刻されたのは先土器時代であった。北町遺跡と指呼の間にある城山遺跡がそれである。城山は戦国時代上杉謙信が、信濃の最後の拠点として飯山城を構築した所である。この城址の三の丸の北側が飯山市當グランドとなっており、昭和20年代にグランド拡張工事が行われ、三の丸の北側を掘削した折に1点の真岩製の綫長フレイクが出土した。当時工事に従事した人の話によると同様なものが数点出土したらしいが、現存しているのは1点のみである。

学史的にみると対岸の木島地区安田神社境内から発見されたという黒曜石製のマイクロコアが著名である。更に隣接する柳原地区では鶴巻、針湖湖周辺から彫器や石刃が出土している。北町遺跡の北方1.5kmほど距てた長者窪でも黒曜石製のフレイクが採集されている。このように飯山地区を中心とした所にも先土器文化の存在が次第に確認されつつあり、今後の調査次第によっては良好な遺跡が私達の眼前に出現する可能性が無い。

縄文時代についてみれば、隣接の柳原地区城端、針湖池周辺等で草創期の表裏縄文土器の良好な資料が得られている。また、神明丘のジャンプ台付近や十三ヶ丘遺跡で押型文土器が、長者窪遺跡では条痕文系の土器が採集されている。縄文前期に入ると何といっても有尾遺跡があげられる。飯山線敷設の折に多量の土器が出土したため注目されたようであるが、縄文前期の遺跡として注目を浴びるにいたったのは、飯山北高等学校郷土研究会がこの遺跡に注目してからである。有尾遺跡の最初の報告者は当時飯山北高等学校郷土研究会の有力メンバーだった田中清見氏である。それは昭和24年のことであった。昭和27年11月飯山町誌編纂事業の一環として故神田五六氏が飯笠神社境内東側の一隅を調査され、円形プランの住居址一軒、有尾式土器及び同時期の良好な資料を得られたのである。縄文前期の遺跡としてはこの他に須多峯、十三ヶ丘、長者窪があげられる。

縄文中期初頭の遺跡として須多峯をあげることができる。昭和40年須多峯台地に県営住宅団地が造成されることとなり、昭和40・41年に地均し工事が行われた。その折に縄文中期初頭土器が多く出土した。出土した土器は北陸地方に親縁性をもつものが多く、同時に関東地方の影響を受けた土器もあり、飯山地方の縄文中期文化成立を考える上で重要な資料を私達にあたえてくれている。縄文中期後半の遺跡として須多峯（初頭土器出土地点とは若干離れている）、有尾、十三ヶ丘等がある。縄文後期の遺跡は現在のところ飯山地区では発見されていない。ただ隣接する秋津地区清川遺跡で堀ノ内式土器が1点出土している。

飯山地区の弥生式遺跡は、凹地を望む微高地あるいは高台に集中する。たとえば城山西側台地、雨池、上倉、有尾、今回調査した北町がその代表である。これに対して十三ヶ丘、牛ヶ首遺跡の



第3図 周辺遺跡分布図（飯山市教委・1977より） 1:25,000

ように低湿地帯を全く離れて高原状を呈する地点に位置するものもある。この両者のあり方は弥生式文化の性格を考える上に興味あるところである。

次に古墳時代について触れよう。古墳ではまず有尾古墳があげられる。長峰丘陵南端の丘頂上に存在する。現在3基が確認されている。その中で1号墳は、長野県最北端の帆立貝式の前方後円墳として知られていた。しかし該古墳は正式に測量が行われておらず、その真正な形状は今後の詳細な測量調査にまたねばならないであろう。2、3号墳は明らかに円墳であり、特に2号墳は明確に円墳としての形状をとどめ小丸古墳と称されている。神明町裏山にも4基の古墳がある。1・2号墳は円墳とされているが、前方後円墳及び前方後方墳の性格を有するとの説もあり今後の課題といえよう。3号墳は方墳、4号墳は円墳である。この中で4号墳は、昭和25年飯山北高等学校郷土研究会によって調査され、古墳を再利用した経緯であることが判明している。飯山地区では以上7基の古墳が確認されている。次に古墳時代の遺跡についてみると何といっても須多塚があげられる。弥生式後期に所属する2基の方形周溝墓に近接して、柳町期の3軒の住居址及び土器、砥石等が検出されている。降って鬼高窓のものとしては桐原健氏が調査した有尾遺跡がある。この有尾遺跡は縄文前期の有尾遺跡より東北方150mほど距てた所に位置している。

歴史時代に入る黄金石上、長者窪、林子畠、有尾等が知られている。いずれも平安時代に属するものである。これ等の遺跡はいずれも保存状態が良好であり今後の調査が期待される。中世以降については割愛する。

## 第II章 経 過

### 1. 調査に至るまでの経過

昭和58年5月6日、県教育委員会教育長より、9月に予定される飯山北高等学校体育馆（格技室）建設事業に伴い同地縄内に存在する北町遺跡の発掘調査を、飯山北高等学校長より委託された場合には受託するようにとの通知があった。

8月10日、飯山北高等学校長より、体育馆建設工事（昭和58年度・既設建物の取り壊しと杭打ち）が9月中旬より施行されるために早急に発掘調査を実施してほしいとの依頼があった。

8月12日、市教育委員会は市文化財専門委員会と協議を行なった結果、調査委託を受け入れることとし、発掘調査は調査会を結成して行なう事となった。また調査会及び調査団員のメンバー編成について協議を行ない、調査会長に浦野飯山市教育委員会教育長、副会長に同教育委員会武田教育次長、理事に佐藤政男氏をはじめとする6名の文化財専門委員と飯山北高等学校滝沢事務長を決め、調査団長に飯山南高等学校教諭高橋桂氏、調査員に飯山北高等学校教諭笹沢浩氏、国学院大学生黒岩隆氏および飯山第二中学校用務員望月静雄を決定した。

8月20日、飯山北高等学校長外山義勇氏との発掘調査及び整理作業委託契約を締結した。

8月24日、文化庁長官あて、埋蔵文化財発掘通知を提出する。

8月26日、市役所において、調査会役員会及び調査団の結団式を行なった。会議において調査計画について細部にわたって協議を行ない、発掘調査日程を9月1日より9月20日までとする事等を決めた。

また、作業員については過去に発掘の経験のある柳原地区の方を10名程お願いする事とし、作業員責任者を岸田義元氏にお願いした。

8月29～31日、調査準備として黒岩調査員を中心に作業員2名を勤員して大型機械による表土除去・グリット設定・地形測量・調査器材運搬・テント設営を行なった。

9月1日、午前9時に発掘関係者全員が現場に集合し、鍼入式を行ない発掘作業の安全を祈った後第一日目の作業に入った。

なお、調査会組織は26ページに掲載してある。

## 2. 調査日誌

一部前項と重複するが調査経過について述べる。

8月26日 晴れ

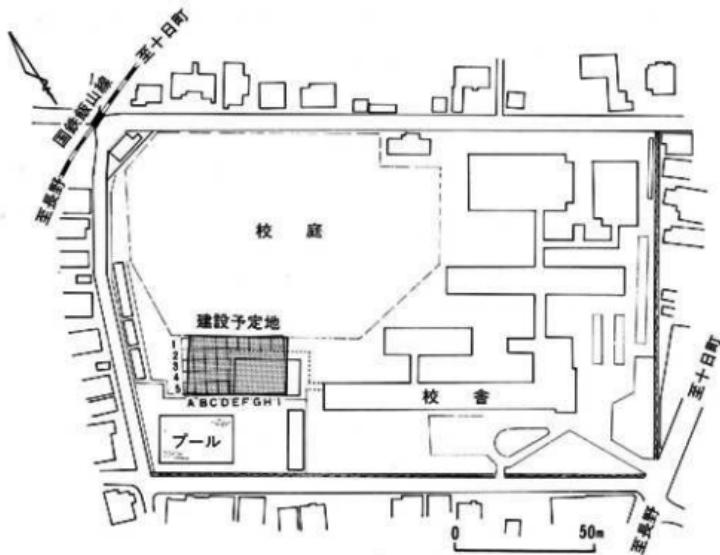
午後5時から「北町遺跡調査会」の結団式が、教育委員会、調査団長並びに調査員出席のもとに教育長室にて開かれる。

8月29日（月）快晴のち曇り

9月1日から調査に入るため、重機により表土除去を行う。表土除去は東側より西側へと進められた。最初1.5～0.7mの深さで除去が行われたが、表土（盛土）下層まで下げてしまったため、その後は0.5～0.3mの深さで表土除去を進めていく。1mも掘ると水が湧いてくる。遺物としては近代の陶器片が、表土下部にみられるのみである。

8月30日（火）快晴

きのうに引き続き、表土除去が10時まで続けられる。その間、器材運搬、テントの設営、立入禁止区域の設定などがなされた。午後からは、校舎の一角を基点としてグリットの設営が始められた。



第4図 建設予定地区およびグリット設定図

### 8月31日(水) 快晴

朝から、きのうのグリット設定の続きを行われる。午後は、午前中に設定されたグリットの配置を既成の千分の1の学校配置図へかき入れる。グリット番号は、まだ決めていなく明日にも決めなくてはならない。

### 9月1日(木) 曇りのち晴れ

朝9時から鋸入式が行われ、調査は本番を迎える。9時半過ぎから調査に入り、土の運搬を考えてD-3、D-5区から始める。完全に取り除かれていない盛土をきれいに剥ぎ、第2層の茶褐色土層を露呈させた。これと同じ作業がD-2、D-4区においても始められた。寄宿舎時代か、それより新しいと思われる柱穴がD-3、D-5区で現れる。遺物としては、第2層上面より、陶器片が数片検出されたのみである。明日は、このグリットの造構確認と他のグリットへの広がりを追ってみることにする。

### 9月2日(金) 曇りのち晴れ

きのうに引き続き、表土除去の作業が行われた。D-2、D-4区に加え、A-5区がきょうから始められる。それと並行して、D-3、D-4区の第1回造構確認を行い、D-3～D-5区にかけて等間隔(180cm)に、黄褐色で隅丸方形の柱穴が2列、南北に伸びていることがわかる。柱穴が掘られた土層中より陶器片、そして、1銭(大正12年)が検出されたことから、寄宿舎時代かそれより新しいものであることが確実となってきた。A-5区では、中央に幅30～40cmほどの黒褐色の帯が南北に走っているのがわかる。中には、焼土、炭化物、そして、陶器片が数片含まれていた。明日からは、高校生の力を得てできる限り表土除去を行うことにする。

### 9月3日(土) 快晴

きのうまでの表土除去作業は、午前中に、さらに、A-5区に続き、B-5、C-5区へと進められた。午後からは、高校生10人の参加を得て、表土除去は、A-1～A-4、B-2、C-4区へと進む。ほとんどがゴミ穴や建物で壊されているが、A-1、A-2区では中央が四角く残っている。また、D-2区を20cmほど掘り下げ土層の様子を見る。遺物としては、2～3片の土器片(古いものは弥生か)、その他、何片かの陶器片が検出された。

### 9月4日(日) 晴れ

表土除去は、B-2、B-4、C-4区で行われ、A-2、D-2区ではさらに下への掘り下げが行われた。A-2区は西側半分が掘られ、黒褐色土層中より2片の弥生土器片が検出される。D-2区は北西4分の1だけが深く掘り下げられ土層をみていった。茶褐色土層の下に黄褐色土層(30cm)、黒褐色土層(30cm)、そしてまた、黄褐色土層と続いていることがわかった。黄褐色土層(上)から2片、黒褐色土層からは10片ほどの弥生土器片が検出される。下部のものは中期頃とみられる。土層が、格技場北側より全体に南方へ傾斜していることがわかる。その他、D

—3、D—4区の柱穴の掘り下げと写真撮影を行った。

9月5日（月） 晴れのち曇り

遺跡の性格を把握する作業が進められる。きのうのD—2区での深掘で、黄褐色土層直下の黒褐色土層が弥生土器の遺物包含層であるらしいことがわかった。そこで、きょうはA—1、A—2区の様子をみることにした。A—1、A—2区では、最初の黄褐色土層が見られず、表土直下が黒褐色土層である。地形的には、東から西へ上がっているのだろう。また、今までの調査の成果からみると、南から北へも多少上がっているように思える。遺物としては、弥生の土器片が、1区で4片、2区で10片ほど点々と出土した。作業はこの他、午後から小型重機により黒褐色土層上面までの掘り下げが、B—2、C—1～C—3、D—1区で行われた。

9月6日（火） 晴れのち曇り

A—2区の掘り下げが進められ、それに並行して、きのう重機でうわ土をはねた部分の遺構確認と土層の掘り下げを行う。遺物としては、A—2区で3片の弥生土器が出土し、1片は内外を赤く塗られた破片であった。また、C—1～C—2区の境あたりに5片ぐらいの弥生土器と中が抜けた木の株が1本現れた。この木の株はまわりの土層から見て新しいものと思われる。明日はB—2、D—1区を下げ、黒褐色土層のレベルまでもっていくことが先決だ。

9月7日（水） 曇りのち雨

きのうの夜中の雨のため、作業は各グリットに溜った水の排水から始まった。しかし、11時を過ぎる頃、再び雨が降り出し作業は中止となった。その間、排水と並行してA—5、C—5、D—5区の遺構の掘り下げが行われたが、水分が多いため検出は困難を極めた。

9月8日（木） 雨

朝から強い雨が降り続いているため、作業は中止された。

9月9日（金） 晴れのち曇り

空はきのうの雨を忘れたかのように、青く澄んでいた。しかし、この空も午後を過ぎると明日を心配するほどに変化した。この空の下で、私たちの調査は進められた。きのうの雨で、グリットが水浸しとなっており、まずは排水が必要であった。その間、A—5、B—5、C—4、C—5、D—5区の遺構の掘り下げを行う。A—5区は、陶器片が2個体分、釘が赤く錆びた状態（使用済）で6本出土した。遺構といつていいかわからないが中央に南北に走った焼土、炭を含む土層中からの出土である。B—5、C—4、C—5、D—5区は柱穴の検出が主に行われ、各グリットから4つぐらいずつ発見された。覆土は、黄褐色土で内部に、陶器片多少含む。大体は土層の変化は見られないが、C—4、D—5区は、上部から下部に部分的に黒褐色土が含まれている。B—5区は水分が多くなり破壊がひどく、柱穴の検出が困難であった。B—4区では茶褐色土が全面を覆い、また、水分も多いこともあって、柱穴の検出はできなかった。これらの遺

構は、各方向から写真撮影をし、きょうのところは作業を終了した。午後の休み後ぐらいから、B-2、C-1、C-2、D-1区の掘り下げをした。D-1区では黒褐色土層を出すために、その上の黄褐色土層の除去が行われた。また、B-2区では黒褐色土層の掘り下げを行った。B-1区北東隅より、灰黒色の横位に太い沈線、斜位に櫛描文の施された土器片が1点出土した。

#### 9月10日（土） 晴れ

きのうの夜の雨で、また排水が必要となった。排水の後、B-1、B-2、C-1、C-2区の第2黒褐色土層の掘り下げ、そして、柱穴列の平面実測が行われた。D-1区は水気が多いため掘り下げができなかった。出土遺物は、弥生土器片が19片であった。B-1区にほとんどの遺物が集中している。中には、横位の沈線ときざみの沈線が施された土器片、櫛描きの文様が施された土器片が1片ずつ、B-1区の南側に近いところから出土した。

#### 9月11日（日） 曇り時々雨

作業の直前から雨がぱらつき、きょうの作業はどうなることかと思ったが、9時半を過ぎる頃、雨が小降りになりついにあがった。作業は排水の後、B-1、B-2、C-1、C-2、D-1区の遺物包含層の掘り下げを行った。B-1、B-2区の北側、C-1、C-2区の北側、D-1区のそれぞれ第2黒褐色土層を掘り下げていった。さらに、D-1区の北側1mほどは、セクション図をとるために深く掘り下げる作業を進めている。遺物としては、54片の弥生土器片が、今日だけで検出された。C-1区からは、径5cmぐらいの土器の底部破片が出土した。その他、櫛描文、平行沈線文などの文様のついた土器片がみられた。また、C-1区からは、先日検出された木の株から3mほどの間隔をおいて1本の木の株が発見された。木の株のまわりは、30~40cmほど黄褐色土の面が広がり（木の株を中心配するのではなくて南東によっている）、木の株は新しいものと推定される。

#### 9月12日（月） 雨のち曇りのち晴れ

雨が朝からぱらつき、今日の調査は無理かと思われたが、晴れ間を待って作業は始められた。まず、きのうまでに出土した遺物の写真撮影、そして、グリットごとに遺物の取り上げと進められた。その後、B-1、C-1区をもう1枚剥いでみた。すると、グリットを斜めに横切る黒褐色土の帶が現れた。その帶は南東方向に向って深くなってしまい、自然の傾斜により堆積したものと思われる。その黒色土中からも弥生土器片が6片ほど検出された。D-1区北壁セクションが最後にとられ調査は終了した。3時ごろには、テントもたたまれ、器材が第2中学校の旧寄宿舎へと運ばれた。4時半ごろから慰労会が行われ、作業員の人たちの労をいとい、作業の最後とした。

### 3. 層序

調査区内における層序は第5図に示すとおりである。調査区内の中で最も擾乱を受けていないプライマリーな堆積状況を示している箇所であり、後述する弥生式土器がまとまって出土した地区である。ただし、肩状地上の特性からか、部分的に中間層が欠如している。さらに第VII層は、特に弥生時代遺物出土地区においては起伏が激しく急激に落ち込んでゆく段差が認められている。これは弥生期においては、必ずしも安定した地区でないという事が窺える。以下、各層について説明を加えたい。

第I層 盛土（黄褐色土層） 季大や小粒の石を多量に含む。グランド造成にかかる盛土である。約30cm。

第II層 黒褐色土層 第I層と同様に擾乱層である。レンガ等を含む。約25cm。

第III層 黄褐色土層 繊密な土層である。約20cm。

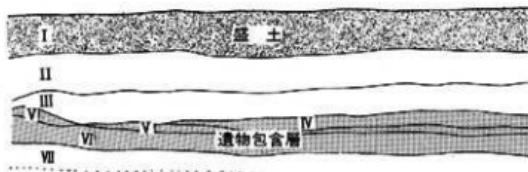
第IV層 黑褐色土層 III層と色調に差が認められるほか、ほぼ同様な土層である。部分的に欠如する箇所がある。5~10cm。

第V層 黑褐色土層 IV層とVI層の漸移的な層である。IV層よりやや黄味を帯びる。約5cm。IV層と同様に欠如する箇所がある。

第VI層 黒色土層 IV・V層に比して黒味を帯びる。緻密で粘性がある。約25cm。

第VII層 暗黄褐色土層 粘性が強く、湿地的な感じを受ける土層である。

このうち、弥生時代の遺物を包含する層は第IV層~VI層にかけてであるが、主体はIV層である。



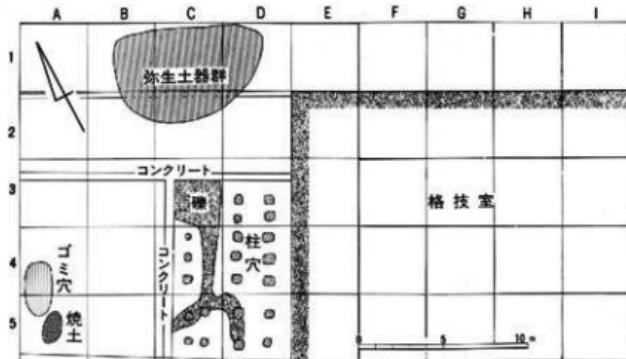
第5図 層序 (D-1 北壁)

## 第III章 調査

### 1. 調査区

体育馆建設工事の面積は $1,140\text{m}^2$ であるが、柔道場・卓球室の格技室が既設されているために約 $300\text{m}^2$ を調査対象面積として計画されていた。結果は約 $400\text{m}^2$ を完掘したが、A-D-2~5グリットは旧建築物の基礎工事がなされた地区であり、ほとんどの区域において地下深く耕起されていた。遺物も近代の茶碗が大部分であったが、数点弥生式土器小片が出土した。いずれも磨滅しており、文様等は不明である。

調査区内で比較的良好に包含されていた地区は、A-D-1グリットである。本地区は旧建築物の北側のグラウンドにかかる部分であって、工事等による地下への影響が及んでいないため、弥生式土器が比較的まとまって出土した。遺物は台帳記載で96点であるが、若干の欠番、後世の混入遺物数点を除き約90点であった。ただ細片であること、磨滅している事等遺存状態は極めて悪く、資料的に図示し得るのは僅かである。



第6図 調査区全体図



写真1 近世柱穴痕

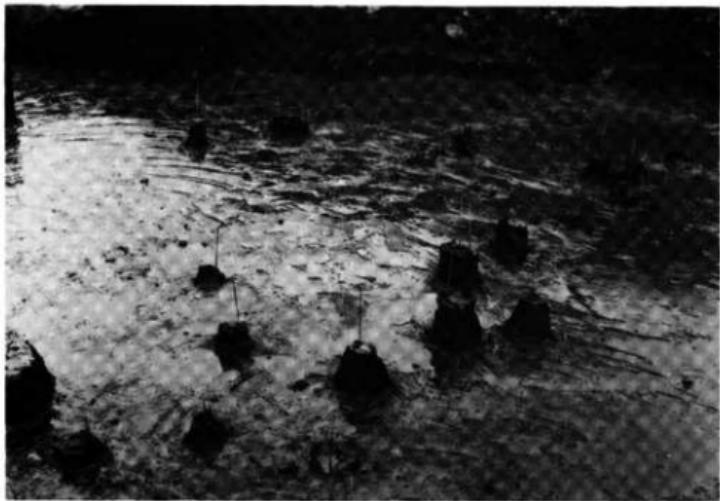
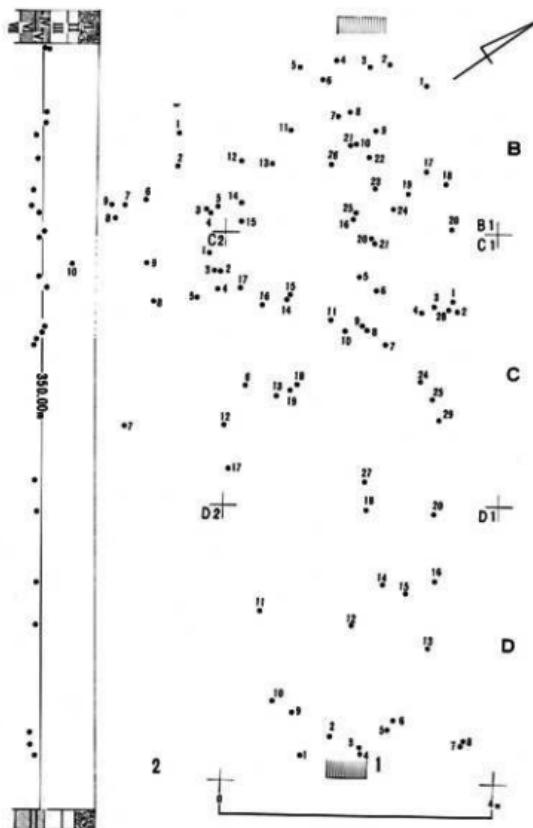


写真2 弥生時代遺物出土状況

## 2. 弥生時代

A～D-1グリットを中心として出土したもので、総数約90点である。しかし、無文土器が多く、さらに遺存状態が悪く文様等の判別可能なものは第8図に示すとおり僅か11点であった。本項ではこれらの資料について説明を加える。



第7圖 弥生式土器出土分布圖

図示したとおり全て細片であり、全形を窺えるものはない。文様構成により以下のように分類した。

#### A

A類 繩文を地文とし、範状工具により沈線が加えられるもの（第8図1～6）。

B類 無文地に範状工具により沈線ないし刺突文が加えられるもの（第8図8・9）。

#### A

1は、範先による縦長の刺突文帯と、その下に範描横線文・曲線文が施される。地文に繩文が施されるが、縦の刺突の部位には、胎土が不良で磨滅しているため明確ではないけれども、磨消されているように思われる。

2は範状工具による車山形文が施される。沈線間には繩文が施され、現存する範囲内では磨消の手法は認められない。

3は曲線的な範描沈線文が施されている。沈線内側の部分は磨消されているように思われる。

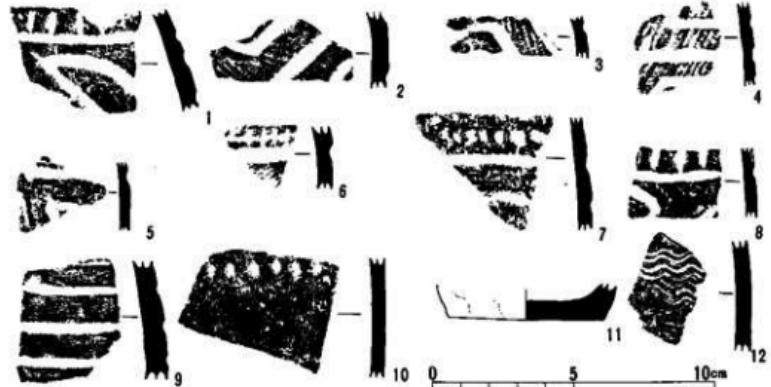
4は、現存する範囲内では磨消繩文の手法は認められず繩文を地文とする。範描直線文が施されている。

5は4と同一個体と思われるが、磨滅しているため、沈線間の繩文が不明瞭となっている。

6は頸部破片である。一段高くなった部分に範先により沈線が横一本、さらに同上に連続する縦の刺突が交差するように施されている。その直下に範描平行沈線文が横走し、繩文帯がさらにその下位に施される。

#### B

7は、連続刺突文と範描平行沈線文が2条横走する。地文は、器表面が荒れているため明確で



第8図 弥生式土器拓影図

ない。無文地と思われる。

8は、竪による点列を施し、その下に竪描横線文・曲線文が施される。

11は底部である。

#### 表

10は無文地に竪先による刺突文を一列配している。胴下半に至る部分であろう。

12は横描波状文が施される。胴部破片である。

以上、少量ではあるが当地方の弥生時代中期の様相を知る上で貴重な資料となった。飯山地方において弥生時代中期の遺跡としては、小泉・小境押出・照丘・鍛冶田D・同C各地点の諸遺跡が知られている。これ等の各遺跡の中で、小境押出を栗林I式、鍛冶田D地点を栗林II式、鍛冶田C地点を百瀬式に比定している。本遺跡出土資料は、少量であり加えて細片のため具体的に比較検討することはできないけれども、本遺跡が縄文を地文とする土器が主体的であることから、百瀬式にまで新しくならないと思われる。したがって、本項では栗林式に比定しておきたい。

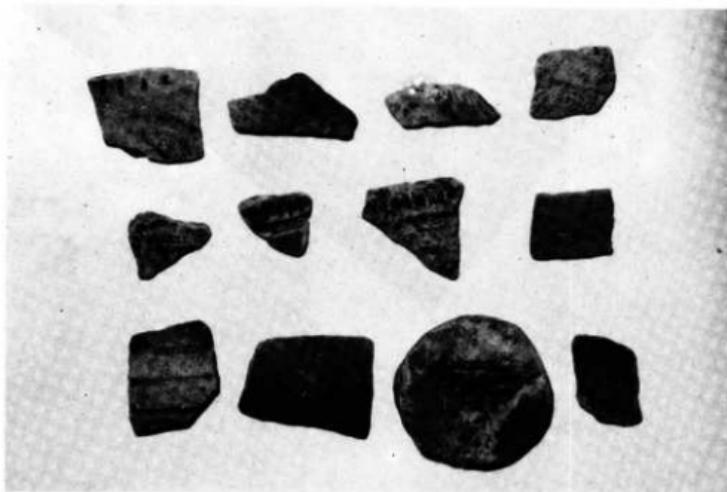
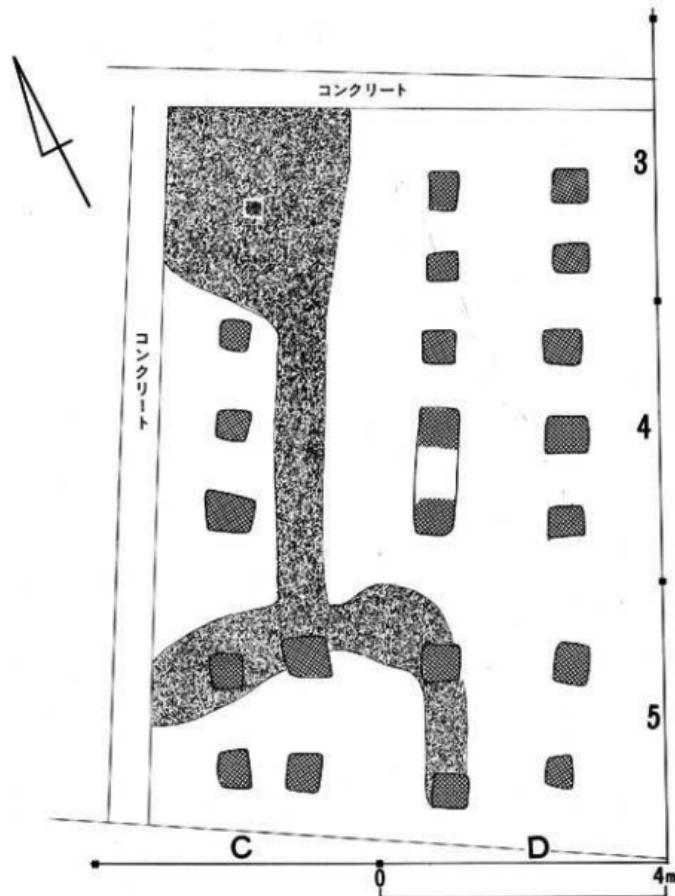


写真3 弥生時代の土器

### 3. 近世(註)

各グリットより明治～昭和にかけての陶器・磁器類が出土した。旧飯山中学校時代の学校位置図(第11図)によれば、当地区は寄宿舎に付属して建てられた食堂・浴場の家屋の位置に当る。A—4・5グリットのゴミ穴・焼土層などは、この厨房施設に伴うものと考えて差し支えあるまい。さらに、出土した陶器・磁器類もこの施設に関連するものと考えて大過ないものと考えられ



第9図 近世遺構実測図

る。

第9図に示したものは、昭和49年に焼失した第二体育館の基礎杭の痕跡であろう。本建築物は昭和42年に移転・竣工されたもので、それぞれ東・西にさらに若干広がるものであるが、痕跡を明瞭にとどめたものは図示した部分のみである。柱間隔は180×120cmで、5と4グリットラインとの境のみ210cmと他より30cmほど間隔が広くなっている。これは移転の際の増築と考えられるが詳細な資料が手元ないのでいまひとつはっきりしない。

以下に、各グリットより出土した遺物について説明する。なお、現在でも使用されているような茶碗等の磁器類は省略し、陶器数点について説明を加えたい（第10図）。

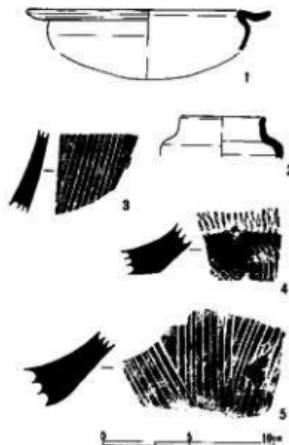
1は口径10.6cmで、口縁以下に内外面とも釉がかかる。口唇部は直角に折れ、幅約1.5cmの平縁を形成している。薄手の陶器であるが、用途についてはいまひとつ判然としない。

2は口径4.6cmで、無頸の小形品である。用途については不明であるが、厨房用品に関係するものであろう。

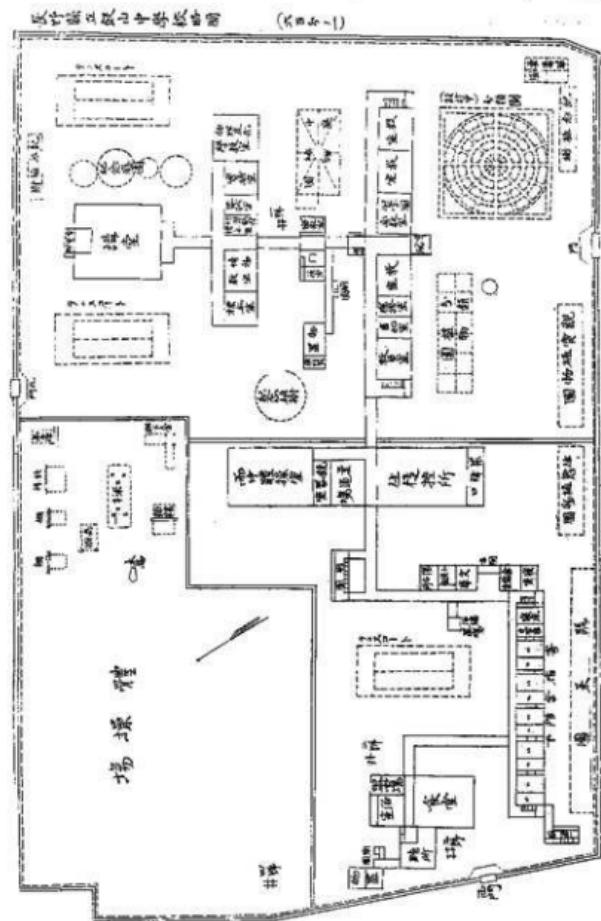
3～5は擂り鉢破片である。4は非常に堅緻で、またきざみ目も深く他の擂り鉢とは異質な感じを受ける。

このうち、1、2は大正12年発行の一銭銅貨が近接して出土しており、この陶器もほぼこの年代あたりに比定されよう。次に3～5の擂り鉢片であるが、特に年代を推定し得るような特徴がないため具体的な時代を比定できない。ただし、上記の陶器と同様に明治～昭和にかけての所産であることに問題はないであろう。いずれにしても本調査地区において出土した近世遺物は飯山中学校時代の寄宿舎と付属する廚房施設に関連するものと考えられ、断片的であるが当時の様子の一端を明らかにできた。

（註）「近世」という用語は、三区分法によっており、日本においては江戸時代以降現代を含む。



第10図 近世の遺物



第11图 旧饭山中学校時代校舍略図 (1:1200)

## 第IV章 まとめ

第I章環境の項で触れているように北町遺跡の発見は、飯山北高等学校の校舎改築及びプール建設工事に伴って発見されたものであった。今回、プールと並行して新体育馆が建設されることとなり、急拠発掘調査を行うこととなったのである。

調査は、湧出する水と降雨そして酷暑という悪条件で難渋し、更に9月中旬までに調査終了という期限つきのもとで行われた。従って調査團としては決して満足のゆくものではなかったというのが本音である。しかし、曲りなりにも調査が終了してほっとしたのも事実である。

調査の結果は、第III章で触れているように当初予想した通りに本遺跡が弥生式中期に所属するものであることが確認された。出土遺物は、弥生式中期の土器破片と明治以降の遺物であった。明治以降のものについては、あまりにも新しすぎ2、3の特徴的なもの以外、本報告書では除外した。弥生式中期土器破片は数量的には100片近く検出されたが、ほとんどが細片であり、器形を窺うに足りるもののがなかった。また図示し得る有文土器もごく少量であった。

ただ、今回調査した地域は遺跡中心地からはずれており、調査地域の北方に中心地域が存在する可能性がきわめて高いことが確認されたことは大きな収穫であった。

遺跡地が、田町、北町の低湿地を臨む微高地に存在することはすでに触れたとおりである。また本遺跡と指呼の間にある飯山城址西南端にも弥生式中期の遺跡が存在していることもすでに触れたとおりである。この両遺跡地の存在から考えると田町、北町の低湿地帯の西側に発達した神明町、愛宕町の地域にも同時期の遺跡が存在することは十分予測されるところである。今後、この地域の再開発が行われることがある場合は、慎重に対処する必要があろう。いずれにしても北町、田町の低湿地帯は、北町、城山周辺遺跡の存在からみて弥生式中期の荷担者達にとって水稻耕作地として最適地と映じ、居を構えたものと考えてよいであろう。外様平の低湿地帯を臨む長峰丘陵西側や関田山脈東麓に居を構えた弥生式中期の荷担者と同様に。

田町、北町の低湿地帯は、戦国時代上杉謙信の飯山城築城に伴ない、城山周辺は堀として利用された。更に明治以降田町、北町の発展によって市街地が形成されるに及んで城山西北端にわずかに水田としてその面影をとどめているに過ぎなくなっている。

末尾ながら本調査に種々と便宜をはかつて頂いた飯山北高等学校当局、調査に協力頂いた旭地区の作業員の皆様に厚く御礼を申し上げます。

## 参考文献

- イ 飯山北高等学校地歴部OB会 1977 「遺跡分布調査報告書」  
飯山公民館 1955 「飯山町誌」  
飯山市教育委員会 1980 「北原遺跡調査報告書」  
飯山市教育委員会 1980 「鍛冶田」
- カ 金井正三 1982 「有尾遺跡」 長野県史考古資料編主要遺跡（東北信） 県史刊行会
- キ 桐原 健 1963 「栗林式土器の再検討」 考古学雑誌第49巻3号
- サ 笹沢 浩 1977 「入門講座 弥生土器—中部高地1～3」 考古学ジャーナル 1・3・4月号
- シ 信濃史料刊行会 1956 「信濃史料」第一卷上
- タ 高橋 桂 1966 「北信須多ヶ峯遺跡出土の弥生式遺物について」 考古学雑誌第52巻3号  
高橋 桂 1970 「柳原の古代文化」 柳原村史  
高橋桂・太田文雄 1977 「北信須多ヶ峯遺跡第2次調査報告」 信濃第29巻4号
- 高橋 桂 1969 「北信城端遺跡調査略報」 信濃第21巻7号
- ナ 長野県飯山南高校考古学クラブ 1961 「長野県飯山市有尾遺跡調査概報」 信濃第13巻2号

## 調査風景

写真 4

昭和58年9月1日  
関係者一同による鋸  
入式  
(最前列調査会式田副会長  
右端外山北高校長)



写真 5

9月1日  
D-3・D-5グリ  
ット調査風景



写真 6

9月6日  
調査進捗状況





写真7 調査風景（西より）



写真8 調査風景（西より）



写真9 調査風景

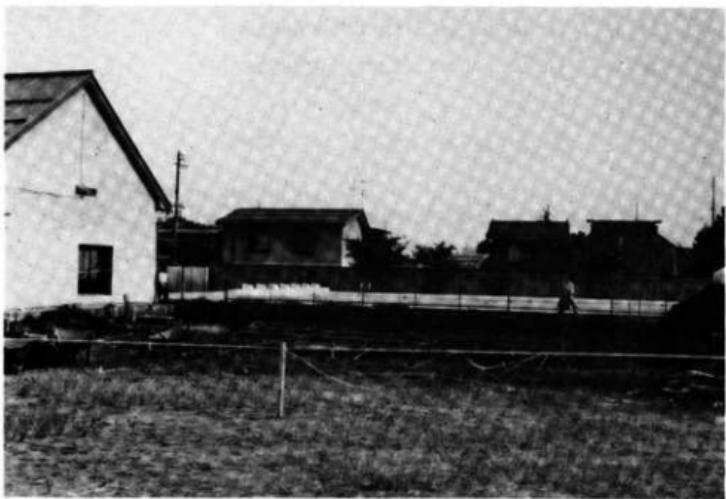


写真10 調査区近景

## 飯山市北町遺跡調査会組織

顧問 小野沢 静夫 (飯山市長)  
〃 外山 義勇 (飯山北高等学校長)  
会長 浦野 昌夫 (飯山市教育委員会教育長)  
副会长 武田 作之助 (飯山市教育委員会教育次長)  
理事 佐藤 政男 (飯山市文化財専門委員)  
〃 高橋 桂 ( )  
〃 弓削 春穂 ( )  
〃 上原 幸夫 ( )  
〃 齊藤 二六 ( )  
〃 藤沢 正平 ( )  
〃 滝沢 清一 (飯山北高等学校事務長)  
事務局 小川 恵一 (飯山市教育委員会社会教育係長)

### (調査団)

団長 高橋 桂 (飯山南高等学校教諭)  
調査員 笹沢 浩 (飯山北高等学校教諭)  
〃 黒岩 隆 (国学院大学学生)  
〃 望月 静雄 (飯山第二中学校用務員)

### (協力者・機関) 順不同・敬称略

岸田義元 (作業員責任者)・北川平吉・鈴木くに子・北川三枝・岸田しづ子・岸田かず江・大塚ふさ子・鈴木ひさの  
飯山北高等学校吹奏楽部・同地歴部・飯山第二中学校 (校長 滝沢藤三郎)

## 飯山市埋蔵文化財調査報告書

第1集 飯山市田草川尻遺跡緊急発掘調査報告書	1973・2
第2集 宮中遺跡 一分布確認調査報告書—	1972・2
第3集 北原遺跡	1979・2
第4集 北原遺跡調査報告書	1980・6
第5集 鎌治田	1980・6
第6集 北原遺跡III	1981・2
第7集 太子林・関沢遺跡	1981・3
田草川尻遺跡II	1978・2
第9集 田草川尻遺跡III	1984・1
—付 清川尻遺跡調査報告—	

### 飯山市埋蔵文化財調査報告第10集

#### 北町遺跡

—長野県立飯山北高等学校体育馆建設に伴う  
調査報告書—

昭和59年2月20日印刷

昭和59年2月25日発行

編集・発行 飯山市教育委員会  
長野県飯山市大字飯山1110~1

印 刷 (株)足立印刷所  
長野県飯山市大字常郷581-1

